

# 住民との協働による能動的学修の展開

## ～今金町美利河地区をフィールドとしたプロジェクト学習の推進～

### I 研究概要

#### 1 研究の目的

本学と地域連携事業の協定を結ぶ檜山管内今金町の美利河地区は、奥ピリカ温泉やスキー場の閉鎖など、地域資源を十分に活用することができず、地域の再生が重要な課題となっている。

そこで、昨年度、同町美利河地区をフィールドとして「健康」「歴史」「観光」をキーワードに、地域課題の解決方策を同町の中学生や町民と協議し、提案を行った。今年度は、提案内容を現実のものとするための情報収集、試行検証を重ねる。こうした課題設定、計画立案、実施、反省・評価の一連の過程を通して、プロジェクト学習の教育効果や推進のための資料を得ることを目的とする。

#### 2 調査研究スケジュール

- 第 1 回合同フィールドワーク（7 月 21 日～22 日）美利河地区の現地見学及び協議（今金町）
  - ・今金町美利河地区のプロジェクト実施地域の現状視察
  - ・「ピリカ祭」来訪者へのプロジェクト期待度調査
- 第 2 回フィールドワーク（9 月～11 月）プロジェクトに関わる情報収集（道内各地）
  - ・テーマ別にグループワーク
  - ※担当プロジェクト毎に、情報収集のためのフィールドワークを実施するとともに大学において適宜チーム会議を開催し、発表データ等の作成を行う。
- 第 3 回合同フィールドワーク（11 月 17 日～18 日）実行委員会・情報提供及び協議（今金町）
  - ・今金町美利河地区のプロジェクト実施に向けての情報提供として、学科ごとに道内各地で行ったフィールドワークの結果について発表・報告する。
  - ・今金町の実行委員会メンバーとの意見交換及び協議
- 第 4 回 報告・意見交換会（2 月 12 日）実行委員会からの報告及び意見交換（大学）
  - ・今年度の同町の実行委員会における検討状況についての報告を受け次年度以降へのアクションプランの策定に向けて、学生・教員との意見交換を行う。

### II 成果と課題 ～調査研究を振り返って～

#### 1 研究の経緯と成果

昨年、美利河地区をフィールドとして「健康」「歴史」「観光」をキーワードに、地域課題の解決方策を、次代を担う今金町の子供たちと協議・提案するというプロジェクトを行った。本学の有する学科の学びを生かすことができるように、キーワードに関連する学科から学生を選出し、ファシリテーターとして子供たちの学びの支援にあたった。こうした活動により、学内での学びを生かし、学生が学外での能動的学修（アクティブ・ラーニング）を展開する上での、効果や課題等の資料を得ることを目的として取組を進めた。最終的に、中学生が提案したのは以下の 7 つのプロジェクトであった。

【健康】 スポーツ指導学科、スポーツビジネス学科

高齢化の進展する今金町において、美利河地区を活用した町民の健康増進方策を検討する

【プロジェクト No. 1】ピリカスロン 【プロジェクト No. 2】ピリカマルシェ

【プロジェクト No. 3】水上ライブ 【プロジェクト No. 4】ウォールアート

【歴史】 現代文化学科

美利河地区が有する歴史・文化的な資源を、保護・活用および伝承するとともに、今金町における歴史文化の発信を考える。 【プロジェクト No. 5】ピリカスタンプラリー

【観光】 観光ビジネス学科

北海道新幹線の延伸は、道南エリアの観光振興に大きな期待が寄せられている。観光客誘致および交流人口を増やすための今金町の玄関口となる美利河地区における総合的な観光振興ツールを考える。 【プロジェクト No. 6】スキー場菜の花一面プロジェクト

【プロジェクト No. 7】外国人観光客と地元多世代が集うコミュニティセンター

この提案を広く町民に紹介するため、町内で 2 月に開催された「人づくりフォーラム」において発表を行った。中学生の提案を可能な限り、実現させてあげようという機運によって、町内の関係団体等が参画する「ピリカプロジェクト実行委員会（事務局：まちづくり推進課）」が組織され、実現に向けて継続的に協議していくこととなった。一方、この取り組みは、学生にとっての効果も確認することができた。一定程度の大学での学びが活用されていることを調査結果からも、確認することができた。また、社会人基礎力の能力要素についても、事前に比して事後は、12 のすべての要素で増加していることを確認した。このような結果から、能動的学修（アクティブ・ラーニング）を展開する上で効果を上げるための二つの視点を確認した。

一つは、本プロジェクトが、学生がファシリテーターとなり、中学生と共に協議し、提案する活動であったことである。アメリカ国立訓練研究所（National Training Laboratories）が発表した研究結果に、異なる学習方法による学習定着率を表す「ラーニングピラミッド（Learning Pyramid）」がある。「講義・聞く（Lecture）」は 5%、「資料や書籍を読むこと（Reading）」は 10%、「視聴覚・見る（Audiovisual）」が 20%、「実演によるデモンストレーションを見る（Demonstration）」が 30%、「グループディスカッション（Discussion Group）」が 50%、「実践による経験・体験・練習（Practice Doing）」が 75%、「他者に教えること（Teaching Others）」が 90%である。プロジェクトの活動の中心となる学習方法は、まさにラーニングピラミッドの「グループディスカッション（50%）」、「実践による経験・体験・練習（75%）」、「他者に教えること（90%）」の 3 つが中心となっている。とりわけ、中学生との共同活動であったことは、中学生の考えやアイデアをカタチにするファシリテーターとしての役割が求められ、日ごろの大学の授業とは違い、他者（中学生）に教えるという場面が随所に見ることができた。このように、「グループディスカッション」、「実践による経験・体験・練習」、「他者に教えること」といった学習方法を取り入れることが重要であることを確認した。とりわけ、中学生との活動は、他者に教える学習方法が中心であり、大学で学んだこと（インプット）を、アウトプットする場面を随所に確認することができた。こうしたアウトプットの機会を学習過程の中に、位置づけることは、学内での学びへの意欲喚起にもつながることになる。

二つは、「現場でのリアルな学び」によるコミュニケーション能力の育成につながることである。美利河地区という特定地域をフィールドとして、そこに住む町民の方々から現状や課題を把握し、中学生のアイデアを形にする活動は、多様な世代や多様な価値観を持つ人との関係性を築き、合意形成していく過程に他ならない。学生に必要なこうした能力は、学内の授業で行われる同世代のグループワーク等の協議において、身につけることは至難であると言わざるを得ない。多様な世代や多様な価

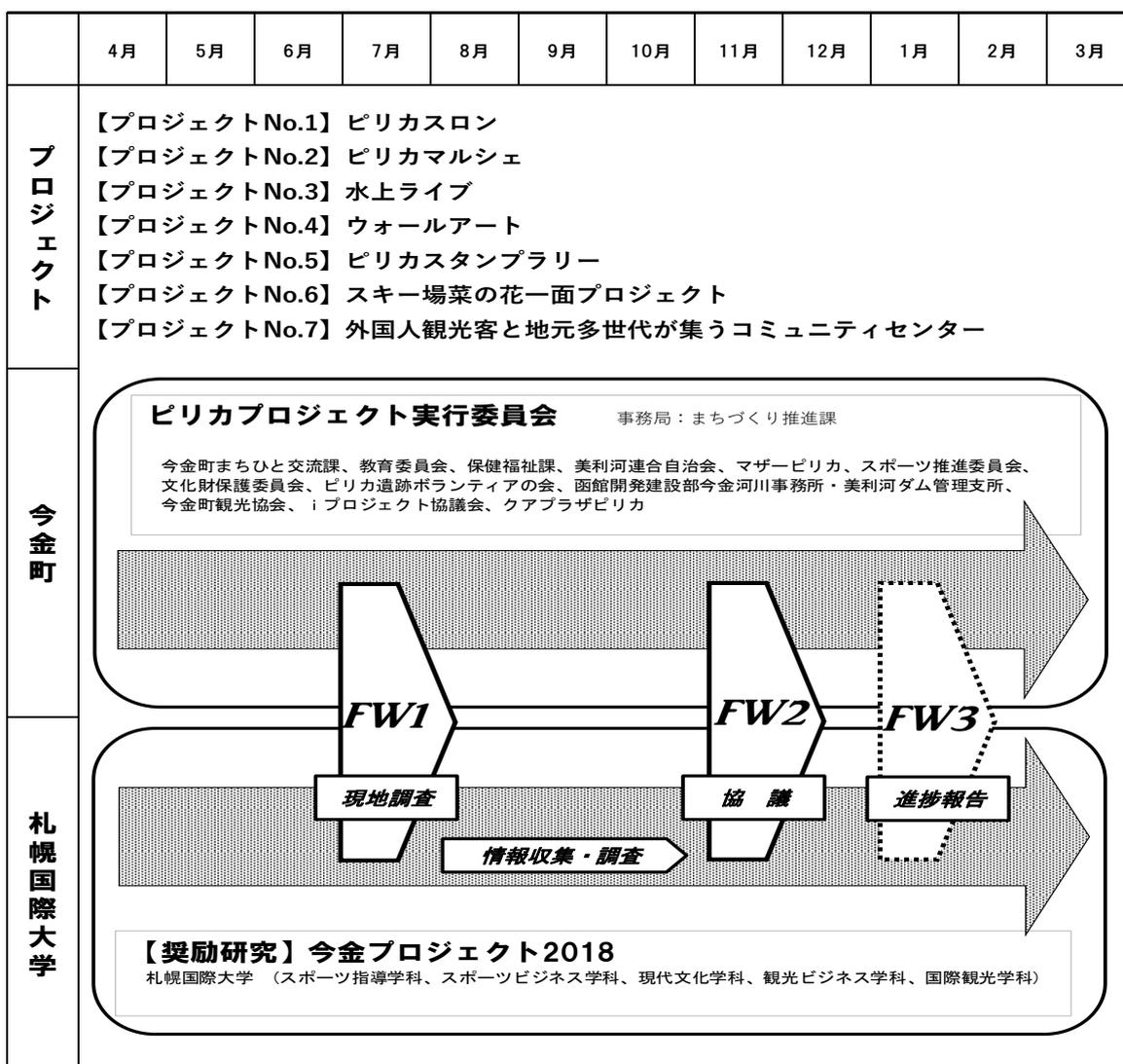
値観に触れることのできる現場でのリアルな学習機会を提供できることは、地域連携によるプロジェクトの大きな利点であることを確認した。

## 2 今年度の取組

昨年度、中学生の7つの提案を実現するために、町内の関係団体等が参画する「ピリカプロジェクト実行委員会（事務局：まちづくり推進課）」が組織された。今年度は、提案内容（プロジェクト）を実現するための課題や障壁として懸念される点などについて、各方面からの情報収集やヒアリング調査を行い、実行委員会のアクションプラン作成のための情報・資料の提供に寄与しようというものである。こうした一連の活動を通して、プロジェクト学習による学生の教育効果や効果的な推進のための資料を得ることを目的として、実施した。

年間の活動イメージフローは、(図-1)の通りである。【FW1】(7月21日～22日)では、今金町を訪問するのが初めてである学生も多いことから、美利河地区におけるプロジェクト実施地域の現状を視察し把握することを目的に行った。また、「スキー場菜の花一面プロジェクト」の実施場所となるスキー場を会場に開催される「ピリカ祭」の様子を見学すると共に、来訪者へのプロジェクトに関する期待度を調査し、今後のプロジェクト推進アクションプラン作成の参考情報の収集を行った。

### 今金プロジェクト2018 活動イメージフロー



【FW1】と【FW2】の間に実施する【情報収集・調査】は、学科ごとに担当プロジェクトを分担し、道内各地の参考事例を収集するとともにヒアリング調査等によりまとめ、プレゼンの資料作りに取り組んだ。【FW2】(11月17日～18日)では、道内各地で行った情報収集及び調査等の結果について、「ピリカプロジェクト実行委員会」において、発表・報告を行うと共に、実行委員会メンバーとの意見交換及び協議を行った。

【FW3】(2月12日)では、今年度の実行委員会における検討状況についての報告を受け、次年度以降へのアクションプランの策定に向けて、実行委員メンバーとの意見交換を行った。

### 3 今年度の成果と課題

これまでの地域課題解決をテーマとしたプロジェクト学習の場合、主に「①地域の選定→②現地調査→③地域課題の抽出→④解決方策の検討→⑤発表・報告」という一連の学習プロセスにより展開されるのが一般的である。最終的に提案(発表・報告)されたものが、実現に向けて次のステップへ発展するという事は、あまり見られない。そこには、学生の教育として行われることから、長期的スパンでプロジェクトを進めることが難しく、解決方策を「提案すること」が目的化してしまっているという現状がある。しかし、今金町をフィールドとする本取組は、本学と今金町の地域連携事業に関する協定によって行われていることから、継続した取り組みが可能となっている。そこで、前年度に今金町の中学生とともに地域課題の解決方策を提案した7つのプロジェクトについて、実現するための次のステップへと進める取組を、今年度のプロジェクト学習として推進することとした。

今年度の取り組みが昨年と大きく異なるのは、【FW1】と【FW2】の間に実施する道内各地の参考事例を収集しヒアリング調査を行い、まとめ、プレゼン資料を作成するという事である。これまで、与えられたフィールドにおける地域課題を抽出し、解決するために地域に関わる関係データの収集や現地関係者からヒアリング等を行うという一連のフローで取り組みを進めてきた。言わば、すべてが当該フィールドにおける活動に終始してきたことになる。

今回の取り組みは、フィールドの課題を解決するために、全国(道内)各地で取り組まれている実践の中から、事例として参考となるものを広く収集し、直接ヒアリングを行うなど、より広範なエリアへ学生の視野を広げ、活動を発展させたことにある。このことによって学生は、「情報収集→実践事例の選定→フィールドワーク(ヒアリング調査)実施計画→アポイントメント→フィールドワークの実施→調査内容の整理・分析→調査内容のまとめ→発表・報告」という一連のプロセスを自らの力でデザインしていくことが必要となる。とかく、地域課題解決をテーマとしたプロジェクト学習の場合、該当地域における活動が中心となるが、視点を外に移し他の優れた実践事例から地域課題の解決を考えるという、発展的な学習展開における成果と課題を、「【プロジェクト No.6】スキー場菜の花一面プロジェクト」の学生の活動から考えたい。

スポーツビジネス学科の学生が担当したのは、ピリカスキー場を一面菜の花にするというプロジェクトである。学生は、インターネットにより、道内の菜の花畑で有名な自治体の情報を収集することから始めた。さらに、詳細の情報を得るために、電話による情報収集及びヒアリング調査の可否とアポイントメントを行った。こうした電話による交渉は、大部分の学生がはじめてであり、学生同士でリハーサルしているのが印象的であった。最終的に、ヒアリング候補地として学生が選定したのが、次の2か所である。

一つは、「JAたきかわ直売所 菜の花館」において、菜の花関連商品についての調査を行った。なたね油の製造過程や生産に必要な機材やコストなど、詳細な聞き取りを行うと共に、関連商品を購入した。この購入した商品については、後日大学において、試食の様子を動画にまとめ発表資料として活

用した。

二つは、「空知農業改良普及センター」において、菜の花栽培の留意点等についてヒアリング調査を行った。なお、アポイントメントの際に、当日聞きたい内容について求められたため、急遽学生が作成しメールで送った主な質問事項が次のとおりである。

【空知農業改良普及センターへの主な質問内容】

- ①連作障害を避けるために毎年畑を変えなければならないのか。毎年変えずに栽培することは可能か。
- ②地面に直播することとポットなどに播種して発芽してから定植するのでは、どちらがよいのか。
- ③無農薬栽培というのは可能なのか。また、農薬を使用する場合の費用、散布するタイミングはいつか。
- ④滝川で菜の花の蜂蜜を作っているが、菜の花を活用した商品としてどのようなものが作れるのか。
- ⑤スキー場の斜面でも栽培は可能なのか。また、斜面で栽培する際に問題となるのはどのようなことか。
- ⑥観光振興のために、菜の花畑を活用する場合の留意点は何か。
- ⑦植えた後の管理として、どれくらいの人数でどの程度の期間・時期で作業が必要なのか。
- ⑧菜の花以外に、スキー場のような傾斜地に適した花等の作物はないか。
- ⑨菜の花栽培には、どの程度の費用がかかるのか。

こうしたフィールドワークによって得た情報を、整理・分析し、11月に今金町で開催された「ピリカプロジェクト実行委員会」において、発表・報告を行うと共に、実行委員会メンバーとの意見交換及び協議を行った。とりわけ、学生とはレベルの違う知識・経験を有する実行委員会メンバーと対等もしくはそれ以上に発言していたことが印象的であった。これは、学生自らが先進事例等を分析し、フィールドワークによって得た情報であることから、発言の自信と説得力を生んだのではないかと考える。

他のプロジェクトを担当した学科学生についても、同様に活発な意見交換となり、学生の発表・報告は、実行委員のアクションプランの作成について有益な情報提供に繋がったと考える。

地域の有する課題を解決するために、当該地域から視点を移し、他の優れた実践事例から有用な情報を収集・分析・提供する活動は、学生が主体的に、「情報収集→実践事例の選定→フィールドワーク（ヒアリング調査）実施計画→アポイントメント→フィールドワークの実施→調査内容の整理・分析→調査内容のまとめ→発表・報告」という一連のプロセスを自らの力でデザインしていくことが必要で、まさに能動的な学習の展開である。

一方で、学生が主体となって取り組む上で課題となるのが、「準備学習」の位置づけである。今回の学生の活動を見ると、電話のかけ方、アポイントの取り方、訪問時のマナー、インタビューの準備と方法等について、事前指導することの必要性を感じる。本事業は、授業に位置づくものではないため、事前の準備学習に十分に時間をかけることはできなかった。学生は、戸惑うことも多々あったが、実践から学ぶという点においては、学生にとって貴重な経験となったことは間違いない。しかし、講義と実技によって事前に準備学習することで、より円滑に活動することができる。今後、地域における課題解決型プロジェクト学習を推進していくためには、その前提として大学のカリキュラムの中で、「準備学習」を位置づけることが必要ではないかと考える。

最後に、フィールドワークを伴うプロジェクト型学習を実施する場合、課題となるのが連携先となり得る地域資源の開拓と言われている。その点においては、平成24年に本学と今金町の地域連携事業に関する協定締結以後、継続して取り組みを行っていることから、担当者間の意思疎通も十分に図られ円滑な取り組みを進めることができている。こうした長期間にわたり継続した関係があることで今

年度のような取り組みも可能となった。この場を借りて、今金町まちづくり推進課をはじめ関係各位に心より感謝するものである。

(代表)スポーツビジネス学科	佐久間章
観光ビジネス学科	横田久貴
観光ビジネス学科	千葉里美
スポーツ指導学科	新井 貢
スポーツ指導学科	本多理紗
現代文化学科	坂梨夏代
縄文世界遺産研究室	越田賢一郎